第一號

毎月一回三十日發行

京城藥報

◎京城藥報は韓國唯一の藥業機關紙にして發行部數も亦大なり◎

發刊之辭

春光は雍々として花笑ひ黄鳥は好音を弄する時、未開國之首都に京城藥報は呱々の聲を擧ぐ、夫れ活眼を開き以て韓國藥業界の現狀を視よ、大に發展[illegible]天地あるに其微々として振[illegible]るの甚だしきは抑も何に[illegible]するや、之則ち粗製藥品の濫[illegible]と藥業家諸氏之不熱心に[illegible]せざるべからざるや識[illegible]して[illegible]なる處、此に於て[illegible]吾人に先輩有志諸氏と相圖り此不振の斯界をして大に發展せしめん爲其れが第一着手として京城藥報を發刊す、[illegible]前途には激浪[illegible]の妨害もあらん[illegible]らざるの難處もあらん、然れども偉大なる抱負と自信とを持せる吾人は元より百[illegible]何ぞ百難[illegible]を[illegible]んや、唯々吾人は吾人の[illegible]を實現せんのみ、聊か所思を陳して發刊之辭に代ふ（鷺城）

祝詞

京城藥報の發刊を[illegible]す　藥[illegible]士　兒島高里

陸軍一[illegible]官　從六位[illegible]等　渡邊悅之輔

笑つて汝の健[illegible]はし　[illegible]　石川淳夫

京城藥報之發刊[illegible]し益々隆盛を祈る　正八位[illegible]　古賀惣五郎

遙に祝京城藥報[illegible]　長崎醫[illegible]專門[illegible]教授　正五位勳五等[illegible]　島田耕一

京城藥報の發刊[illegible]す　内務[illegible]大阪衛生試驗所長　藥學士　平山松治

大阪[illegible]試驗株式會社技師　從五位[illegible]等　大中太一郎

正六位[illegible]等　馬屋原鐵藏

大阪[illegible]試驗株式會社技師長　藥學士　大島太郎

京城藥報の發刊[illegible]祝す　大阪府[illegible]議員　市[illegible]議長　改野[illegible]

京城藥報の發刊[illegible]し併て其隆盛を祈る　日本[illegible]劑師會大阪支部副長　[illegible]　小林龜松

發刊を祝す　大阪[illegible]專任講師　藥[illegible]士　龜川兼吉

和田鎌治

西村德藏

時代の要求に[illegible]に生れたる京城藥報の發刊を祝す　内[illegible]衛生試驗所技師　[illegible]士　町口英三

祝發刊　[illegible]　福山利助

發刊を祝す　[illegible]　小西喜兵衛

祝京城藥報[illegible]　韓國の土地たる[illegible]彼の日韓條約締結に[illegible]國城の[illegible]に、溶し朝に夕に諸[illegible]完[illegible]に達しつゝありと

雖ども玄海より流漸する淅颯たる蒸風を挽つて、同地の藥界を展望するに、皇國の其れに比し嘅噬頗る遜色せるを識る、此の時に際し之れが刷新發展の針砭たる機關紙、京城藥報を今や將に韓京より發刊せらるゝと聞く、余等此の壯擧が韓國藥業界現下の趨勢に硒當せるを信じて疑はず、

願くは斯[illegible]發の爲拮据努力せられん事を、敢て望む聊か蕪詞を陳じて祝言に代ふ。

明治四十一年三月一日

日本藥事協會

幹部員

藥劑士　濱太一郎

藥劑士　三木勝太郎

藥劑士　熊田次郎兵衛

藥劑士　島津飯三[illegible]

會員一同

祝發刊　日下部益五郎

道修藥報主筆　淸水如水

日天厳に潛み、月天雲に隱れ、百鬼羅刹の跳梁跋扈は將に長へに是を拂ふの期なかる可き乎と疑ひたる我が藥界も、臥薪嘗膽の効空しからず、今や一道の光明を認むるに至れり、苟しくも天下の憂を以て憂とする慨世の志士、豈努力せずして可ならむや、聞説く京城の有志者今回相圖りて京城藥報を發刊し以て大に斯道の開發に貢献する處あらむとすと、何等の義擧ぞや、何等の壯圖ぞや、國家の爲め謹て其發刊を祝し、重ねて健全の發達を祈る

祝京城藥報發刊　縣立神戸病院藥局　藥局長　秋山卓爾

京城藥報の發刊を祝し併而永遠の發達を祈る　同局員　八木篤

祝發刊　春錦堂　猪飼史郎

兵庫縣技師　藥若雄次

春雜吟　蒼田

祝日の村出て村へ春の旅
京の水ちよろ〱温み流れけり
城跡に大[illegible]べの紙鳶
藥草を摘みて堤を下りけり
報音の谷に音なく蜂を入
發田の笹を浸して水口祭
行く春を八瀬の女の宮詣で

寸鐵錄　ミドリ生

へ政府は藥劑士を視るに醫師の處方箋に依りて調劑す可きもの也と定義せり、藥劑士なるものは單に處方箋に依りて調劑云々なるものが職務なるや、將又藥劑士によりて調劑す可きものなるや其間の解釋極めて朦なり

ハ若しも前者によりて解釋せんか、藥劑士は必然調劑のみの天職也即ち絶對のものなり、後者は藥學為能の職務を執り、而して處方箋上の調劑は藥劑士のみが取扱ふ也と義務的のものなり、何れがホントウなるや

ヘ丁未以來藥學博士の箔は此所の山、彼方の谷間にニヨキ〱と芽を出せり、目出度き哉新博士、此の芽が乘道に發生すればこそマダシモ天を衝く而已なり、若し斜めに萌芽すれば互に角突き合は免かれざるべしれ目度い哉新博士

論說

韓國藥品貿易論

在韓國京城　古賀筑水

抑も韓國は我と同文同種の國、加之一葦帶水を隔つるに過ぎず故に往古彼我の修好茲に千有餘年即ち三韓以來韓半島歷史の一半は殆んど我帝國との關聯より成るにあらざるものなし韓半島の運命は直に我帝國の運命也半島は必ずや我邦人の處置せざるべからざるなり

今や吾人は經營問題に推移せり經世家は幾多の經營問題を持し着々實行しつゝあるなり或は實業家は經濟上の見地より□□の事業を講究せるにあらずや然るに□我藥家の未だ藥品貿易につき講究せるものゝあるを聞かず故に吾人は我實務上對「日韓藥品貿易」を講究するの用あるを信ず否寧ろ研究せざるべからざるの位置にあるなり之れ吾人藥業に從事するものの義務なりと信ず依て吾人聊か研究せるものゝ一部分を述へ世の先覺諸賢の高敎を俟つ

「貿易事情」の著者佐藤氏は「國を富ますの道は如何産業を開發して國本を培養する是れのみ産業大に興るの曉は如何遠く販路を世界に求めて列國と生存競爭塲裡に相見ゆ永く優者の地位に居らん事を期する即ち是れのみ吾人は世界貿易の大勢を觀して本邦の現狀に至る毎に未だ曾て此感を切にせずんばあらざるなり」と

韓國貿易は今や年一年增進し外國貿易額（明治四十年末調）五千万圓以上に達し就中日韓貿易は二千八百有餘萬圓にして百分の七十を占め殆んど韓國對外貿易は日韓貿易の獨占する所にして地の利を占むる斯の如くにして遂に能く爲す所なくんば是れ邦人空しく天に背き何れの日か能く太平洋上の新主人公たるべきか

最近十年間韓國外國貿易總額

年次	輸入	輸出	合計
明治二十八年	八、〇八八、二一三	二、四八一、八〇八	一〇、五七〇、〇二一
明治二十九年	六、五三一、三二四	四、七二八、七〇〇	一一、二六〇、〇二四
明治三十年	一〇、〇六七、五一四	八、九七三、八九五	一九、〇四一、四〇九
明治三十一年	一一、八一七、五六二	五、七〇九、四八九	一七、五二七、〇五一
明治三十二年	一〇、二二八、六六六	四、九九七、八四五	一五、二二五、一[illegible]
明治三十三年	一〇、九四〇、四六〇	九、四三九、八六七	二〇、三八〇、三二七
明治三十四年	一四、六九六、四一七	八、四六一、九四九	二三、一五八、四一九
明治三十五年	一三、五四一、四三九	八、三一七、〇七〇	二一、八五八、四七九
明治三十六年	一八、二一九、一八三	九、四七七、六〇三	二七、六九六、七八六
明治三十七年	二六、八〇五、三八〇	六、九三三、五〇四	三三、七三八、八八四

日韓貿易額の韓國貿易額に對する割合表

區分	明治二十八年	明治二十九年
日韓貿易額	八、二〇五、一六六	八、六九〇、三五一
韓國外國貿易總額	一〇、五七〇、〇二一	一一、二六〇、〇二四
割合	七、七六	七、七二
區分	明治三十年	明治三十一年
日韓貿易額	一四、五三三、〇九九	一二、三〇〇、一三四
韓國外國貿易總額	一九、〇四一、四〇九	一七、五二七、〇五一
割合	七、六三	七、〇二
區分	明治三十二年	明治三十三年
日韓貿易額	一〇、八六三、五八二	一五、四七三、七二三
韓國外國貿易總額	一五、二二五、一八五	二〇、三八〇、三二七
割合	七、一四	七、五九
區分	明治三十四年	明治三十五年
日韓貿易額	一六、四五三、九九七	一五、三三八、八六六
韓國外國貿易總額	二三、一五八、四一九	二一、八五八、四七九
割合	七、一〇	六、九七
區分	明治三十六年	明治三十七年
日韓貿易額	一九、一五四、五九三	二四、七〇四、六五八
韓國外國貿易總額	二七、六九六、七八六	三三、七三八、八八四
割合	六、九一	七、三二

我帝國の貿易（韓國に對する）は前表の如く七割内外を占め居れり而して日露戰爭以後益年々發達を見るに至れるは喜ばしき現象なりと云ふべし

一般貿易は以上の如き好況を呈し尚年々歲々發達しつゝあり然らば我藥品貿易は何如なる程度に發達しつゝ如何に實行せらるやを討究せんには順序として左の數項を設けて說くを便利なりとす

(一)韓國に於ける衛生の狀態
(二)藥品需用の狀況
(三)韓國醫藥學敎育の程度
(四)日韓醫師藥劑師
(五)本邦人移住者の增加
(六)藥品の三大需用地
(七)韓國產の藥品
(八)藥品製造工業の狀況
(九)最近輸出入藥品の統計

（未完）

粉末藥は何故に日本藥局方品として官衙會社及び箇人は封緘を貼用なす？

三木碧冷
熊田芳靜

予等日本藥局方を通覽するに未だ粉末藥（生藥）の明文有るを視ず然るに市場に於て本粉末藥を日本藥局方品として取扱ひ又官衙、會社及箇人之が局方適品たるの證明封緘を施し居れり抑も藥局方品なる名稱は藥局方法文より出でたるものにして、此局方法文以外の品は其何たるを不論、毫も局方品なる名稱を利用する能はざるの事は予等が多言を弄する迄もなく、其の條理、至言なるは識者の夙に知る所なり然れば官衙、會社及び箇人が該粉末藥を以てするに局方云々の封緘を貼用せるは抑も何を針砭とし、標準とせる乎哉又當局者が公然之れを默過なせるは幷も奈何なる故なる乎

吾人其の理由を了解するに苦しむなり、故に敢て識者の高示を仰ぎ以て當局者の反省を促す所以なり、（二月十日起稿）

大阪より

拜啓愈々御發刊の運びに至り候由敬賀至極至極に存候貴地は大阪藥業界と緣故最も深く其盛衰は大阪藥界と大關係を有する可く從て機關紙も一二拜讀仕候得共ざれもこれも山里育ちにて何故根底の確固たる機關紙出でざるやと怪み申居候處果して貴紙の御發刊を承り是れ即ち大阪藥業界が韓京に於ける大發展を表明したるものと欣喜の情禁へ難く喜び申候而して貴紙が韓京の唯一理想的藥業新聞たる事は斷じて疑はざる處に御座候斯界の爲め忠實に大々的御成功を希■候

當地藥業界は「いづこも同じ秋の夕暮」今は樂しき平和？の夢に耽り申居候裏面には多少の暗鬪はあらんも個々に渉り八釜敷分業の聲も一陣の熱風と化し碧空を横ぎり申候官封廢止とか藥劑の精神とか枝葉の空騷ぎ然し官封廢止は稍々問題が大きく炎の手は昂りどうやら物になりそうに御座候それに付けても昨春の活動は一塲の夢かと想像せられ其疲勞か反動的に今春の靜寂と合點致候藥律改正案——活動が勞熱として未だ腦裡より忘れされず志士は來る可き分業案の活動を待ち焦がれ居候

機關紙は艸藥、藥名が東西の重鎭として認められ申居候然かし振はざる事久しく皆々廣告にかぶれたるに非ずやと思ひ候又果して藥界文士の拂底なるか兎に角好現象に無之候近來道修藥報とか申す機關紙が現われて候金滿家の資本主より成立したるものゝ由にて寧ろ同見藥報と改名する方が■當かと臆測致され候序に小新聞なれど藥劑新報とか稱する機關紙が内容は稍々振ひ申居候此新聞は半第半文學のぬらくら新聞に御座候

其他に澤山有之候も皆雨後の筍同樣傍生物に御座候兎に角昨年は藥業新聞の大豐年なる事は堅く信じ申候先は新聞消息迄他は後便に讓り申候頓首　（町の人）

京龍藥業界ノ現況

筑水生

現時の京龍藥業界は如何なる曙光を放ちつゝ活動せるかこれ母國同業者の知らんとする所吾人も亦これを母國同業者に告げんと欲するや茲に年ありしも未だ好機關なきを憾みしに藥報發刊あり以て鷄林八道の同業界の狀況を報せん

目下京龍に藥劑師二十三名あり開業者六名藥種商に雇聘せらるもの二名（他は官公立病院官衙に奉職）藥種商二十有餘にして殆んど三十八九年より四十年に開設せるものにて藥劑師の開業は三十九年六月に河又隆太郎氏の開業せるを第一着とし田淵芳太郎氏は同年龍山の前途有望なるを認め開業し未開の龍山藥業界をして開發せられたるは氏の着眼の非凡なるを證して餘りあり四十年濱口源太郎氏は京城藥品卸賣合資會社を辭し京城に獨立開業同年川瀨一五郎氏は漢城病院を辭し龍山に開業せられ尚時勢の向ふは藥劑師を雇聘するの必要ありて現に京城に二ヶ所の藥種商は藥劑師を聘し藥局開設調劑の需めに應せられ店務監督せられて盛んに營業せり以て如何に藥劑師の開業を喝望せるから證すを得ん藥種商新井虎太郎氏は昨年支店を京城に設け賣藥化粧品卸商に從事し近藤荒木井口三氏の如きも老舗として知られ古城輪之助氏は藥劑師を聘し盛んに營業しつゝあり山岸祐太郎氏は化學藥新藥等を持し病院等の用途をなし居るも尚多く進歩せる韓國の醫藥業界の望に應せんとしつゝあり其他の藥種商は小規模のものにて報するの價値なけん概して販路廣く前途有望なり母國の藥業家よ幸に機を得て渡韓視察せられなば其得る所亦大ならんか



襟度之宏量

碧冷

大凡そ人間事を起さむとするや幾多の風浪を凌ぎ幾多の險礁を蹴越し艱辛酷寒の愁苦を嘗る覺悟を忘るべからず此の覺悟自信自負するの識量則ち襟度を名けて忍耐力とは言ふ而して忍耐力なるものは亓がエネルギー無限深大にして學術の研究朝進夕步の今日に到るも未だ之れを測るの術策あるを聞かず

蓋し斯の忍耐力たるや人の經世に於て成功の成否を支配斷定する不成文的の統攝權能を掘揑なせばなり然り而して是の成功の建築に闕く可からざる柱礎の資料たる忍耐力を奈何にして收得作生爲すを能ふべき乎との言に應對して吾輩は左の定義を下さんとす

忍耐力は襟度の宏量にして活氣あるを意味す

今之れが證例を擧ぐれば彼の憲法を制定され國是を掟められしも之れ時世の進運に遭遇し國家の前途を洞察せし憂國の志士が身を犧牲に供し悲憤の鬱滿と慷慨の涙塊を以て驅躬せし動作にして詞を換て言へば時の識者が卓見により國是をして時代に協諧せしめたるものにして之れが動機は活動の原動力たる要素忍耐力の現實に外ならざるなり

又彼の十九帝國々會に建議以來藥劑界に時ならぬ喧囂を極めし改正藥律問題も遂には天下の輿論を惹起し昨冬開會の二十三議會には政府側から之れが提議に出づ是の間の經路に就ては一朝一夕に發達を得ざる幾多の難局難關ありしも兎に角不滿足ながらも今日該案の實踐を視るに至りしは政府進んで建議の事に出たるとは言へ國民も俱に其の須要を自覺認要せしに本づくなり然れど他人の事は吾れ不知の語あるが若く同胞の意思をして愛に注せしむるに出でしは當事者たる藥劑界の行動其の功を奏せしに因る

然れば我が界に於ける未決問題たる藥醫分業も同人等の活躍奈何に因て決する事は多言を俟たずして明晰ならずや併し活躍と言ひ活動と謂ひ固は個人又は團體の行動力にして謂所忍耐力の由て生ずる作用に他ならず

故に與論に藥劑士現下の職責の徒らに荷重なるを嘆じ之れに反し職權の法律明文に照し其の果實なき不條理を主張し呆く迄も國家衞生の完成を望み圖る多涙多血の仁志は恒に之れが貫徹に蹇澁不屈の意氣を以て孔々として努力せんには譬へ涙たる該問題も時潮の進運に伴ふ國民衞生思想の發達は之れ則ち天下の聲となり與論となり誘て實施の赤旗を見るに至る

蹶起戮力せよ四千の同人現下の藥律は諸の君きなれども顧て思撫ねば同人等が力の足ざるに出ず然れば之れを矯正爲すも同人の務め故に徒らに現狀に甘んじ垂拱默從而して風潮に委ず如き女性的觀念を捨て覺醒以て率手一番男性的懇動を執り正々堂々之れが刷新に將た旣得權の回收を絕叫せざる可からず

之れ本論の骨子にして淺見菲才の碧冷が禿筆を揮ひ敢て諸君の反省を促す所以實に愛に存するなり夫れ前進の若く事の成否は當事者たるものゝ忍耐力の有無奈何に因て決す併れども是の忍耐力なるものやも千人が千人に採て何人も至難なることは言わずもがな然れど之れを凌ぎ將た之れに克ざれば人たるの資格莫き者にして人生の本義に反せるなり故に己人にまれ團體にまれ或る事業を築立し之れを成完せしめんと思惟するには亓が原動力たる拮据經營の精神則ち忍耐力を必要とす斯の忍耐力を奈何にして作生なすやは既に至言したる若く其の源は活氣充てる胸懷の曠量より湧するものと主張するなり

何となれば凡そ人生を通觀するに襟度の小なる者は常に他人の蔭におりて動き事に會て決斷力に乏しく斯は定見識量なきに因るされば百般の事を處置する姑息彌縫に出で以て已れから沈鬱愁傷にタイムを徒消す暗愚も又甚しきならずや

之に反し襟度の宏濶なる者は事に遭遇して自重泰然として迫らず撓まず之れを裁決し處置する恰も電霆の激する行動に出ず故に心胸常に綽々として餘裕あり此綽々たる餘閑は沈着心となり果斷力となり將た不撓不屈の膽力となる然り是の膽力は窮苦を凌ぎ艱難に耐へる砥礪となり活氣を生み活躍の動機と變化し異の樂觀と變ず此の樂觀は度量の宏碩を意味し則ち之の泉底より識見の卓越を生み抱負の大なるを生む而してこの抱負なる意義は野心にして野心は百般の事を築立する基礎にして之れより又忍耐力を生む之れ哲學の定則ならずや

然れば胸裡の廣狹は實に成否の分岐を意味し人生の樂觀。悲觀の試金石なり豈に事を成さむとするもの〻味ふべき果實ならずや夫れ廣義に於ける忍耐力が斯の若く事を企つ上に措て之が砥柱となる其の理源果して何處より來る哉 靑史に曰く「陽春召我煙景大塊假我以文章」と斯の如く人生をして爽快に幽美の雅園に在らしむる儲を想起せしむ心果を採れば果覺するに自れの胸襟を開放して宏大深雅なる宇宙の光景に對して之れが眞意を咀嚼し之を味ひ得る心あるに因るものなり

蓋し斯る心なくんば奈何に淸新美妙なる天地の景象に圍まれ起居閑遊なすと雖ども毫も愉快なる生活を爲すを不能然れば人は躬から己れの不運薄倖を託ち境遇を愁嘆し拔て夫の無情を恨み不愉快なる月日を徒費なすは之れ皆自れの意想の不健全なるに歸着するものなり其れ俗言に謂はゆる自業自得とは此の眞意を洞破せるの玉條なり

覺醒せよ同人等往け來れ野に山に原に海に決して憂愁嗟嘆の聲を洩し悲哀の淵に沈む如き小膽を持する勿れ悲哀憂鬱は忍耐力なき薄志弱行の徒輩が演ずる處

宏落不羈泰然たる襟度あらば假しや何程困難に際すとも遭遇百般巧に之れを切り拔け高風淸月の懇動に出でしむ之れ心悔の曠量なる反映なり

此くの襟度ありてこそ野心も出來活動も出來るものなり

然るに飜て我が藥劑界を觀るに斯の胸懷を有する者幾程乎あらん今其の正跡を擧ぐれば昨秋東都に日本藥業團の結社起るや各士競て自が黨の勢力伸長に關する阻害物と看做爭ふて比難又攻擊の矢を亂射し自然の理に崩落の狀態に至らしめぬ

同年朧霜の如月の候浪花城下に斯界の革命子日本藥事協會の起つや內訌は拗揩き之れと等しき運命に遇い憫れ今は其影蹤だに止めず數多の志士は長恨の血涙を呑み離隔散亂す又此の協會と同時に設立せし東亞新聞社は幾百の資金と幾百の青年志士を犧牲に供し粉身拮据 極 力之れが貫徹に努めたるも同紙廢刊の理由書にもある如く慾望の徒の嫉せしあらゆる反旗に依て旗幟鮮明なる築寨も凄慘長恨を天に漲らして崩落し幾十の筆者は悲痛哀惜の暗涙を冷々互の袖を濕し天涯萬里を望で愁然羈旅に就く

之れ斯界の黎明臺をして慘膽にも破壞せられし原因は

常識なき愚陋の徒即ち定見識量なき胸度の小さき者の輩が遺憾にも我が界に多き謂以なりと予は斷言するも敢て過言にあらざるを自信するなり

何たる沒曉漢の多きや噫々斯界の人心を一洗し今に之れが矯正に着手せずんば常に諸種社界の嘲笑をうけ殘て斯界の前途に寒心せざる事多々出來するは火を見るよりも明なり

然れば藥醫分業の今尙行われざるに就ては種々なる原因もあらんが吾輩をして言しめば斯は全く藥劑士の人格をして社界に未だ信認を博するに至らざるとに歸因するものと思惟するなり

奈何となれは夫れ森羅萬象の事總て當事者の人物に依て信を置き將た置かざらむとす退て考ふれば信條は經世の大倫然れども斯の信否信は人々何を以て表わす乎と言ふに襟度の廣狹奈何に因る則ち胸懷の大小は自然に交際場裏に波及し倦厭せらるゝも將た燕嘉を受るも皆愛より出ず何となれば襟度の大なる者は交際應對に會ひ發溌るゝ態動は如何にも自然に出來何人に對しても快活に何事を處置する上に於ても圓轉滑脫掩ふ可からざる優婉なる情に出ず

斯は快活乎頓才乎將た機敏乎言ふ勿れ之れは氣宇の性情が宏碩なるより自然天然に流露し結果なればなり故に成功と云ひ活動と言ひ忍耐と言ふも總じ來れば襟度の宏量より自然に現るゝ果實なるを以て我藥劑草澤の人士も願くば此の觀念を持し實踐躬行斯界の發展に戮力せらるるは當然の義務なりと吾人は論斷する者なり

社告

本紙之延刊 本月三日發行すべき處何分創立際とて多忙を極め止むを得ず本日發刊す乞是れを諒せられんことを

寄稿を觀迎す 藥事に關する論說學說及文苑の投稿を觀迎す

第二號發刊は四月三日を以てす本月廿五日迄原稿送達を乞ふ

京城藥報社

小說

義姉さん

星濱

「…………。」

永い／＼恰ど懐い森の奥の方で、魔神が友を呼ぶ如き不快な溜息が義姉さんの口から洩れた唸きは腹から胃の腑を破つて戚るものを地の底に壓して、其響物の三きが連れを招くかのよふに自分の皷膜を打つ、音は纖緯を傳ふて神經中樞に聚まる、數間の看護に疲れた五体を横に倒して、何ものをも認め得なかつた自分の精神は今の刺戟に固て死の境界から半意識の狀態に甦る。

「………。」

第二の唸きが又耳に觸れる。

幻つの界が意識を明瞭ならしめて死の街は何時の間にやら消されて終ふた、自分は漸く枕を放れる夜陰に濕つた六疊の此の室つは有るか無しの洋燈に因て餘命を保たれて居る、薄き光りは二尺角程の疊目を照して冷かである、自分は唸きの徑路を辿つて義姉さんの病床に視線を落した、大柄唐草の夜着が萌黄に縁とられて、其襟から脱した義姉さんの横顔が、細き洋燈の名殘りを浴びて居る、窪んだ頬の影がどこまでも／＼落さんと努める無造作に束ねた黒髪が、過ぎし春の夜の枕に睦れ囁いた物語を忘れて、其幾筋かゞ亂れ縺れて――脂氣を失ふて居つた。

「ア、窶れなすつた事――――！。」

窶れと云へば愚痴に落ちる、お氣の毒と言はば世が呪ひ度くなる、熱すればこそ同情の詞も出づるなれ、戀を奪はれた自分の胸は中々に涙の出づべきもので無い女を呪い世を咀いて、ならば意趣の炎を大空に漲ぎらし、万人悉く焼け爛れた時に、自分は冷かな笑いが起るのである。萬籟閒たる夜の氣を破つて、隣家の時計は三ツ鳴つた、遠き滊車の音だらう、鐵橋を轢る轟々の響きが地球の上皮を脈するかのよふに聞ねる。――地獄の釜?! 靑鬼赤鬼に引き立てられて、阿叱呼喚の悶ね苦しむ亡者の聲、は今のあの車軋が實現せるのであるまいか貴??族も富者も乃至無理な戀に勝利を博した万人は、夢に其聲を其悶を車軋に移したのであるまいか―――。」

自分は冷かな笑いを催した。

「濟らはしい………。」

來る戀の魔を退けて、薄き溷闇の上に端座した魔の叫び――亡者が喚く轟々の音は益々近づく、濟らはしいと刹那の感は消ねて、攻め寄する異樣の聲が、靜かに耳を貫く時は、總ての感念を捨てゝ傾聽する三寸の神經纖緯は悉く自分の精神を天空に飛ばして、此の釜を観よと中樞の私語く、――此瞬間………此刹那に兄は居るかと自分の神經は反問した。

兄は學士である、角帽を着て大きな卒業證を抱ねて赤門を出た人である。その時に義姉さんはマーガレツトに結ひて、兄と寫眞を撮つた。此室の小やかな床間の隅に、塵の積りを恨みもせずニツケルの寫眞挾みにあるのが、其時の面影である。

陽炎の立ち登る空は麗かである逝く春を幾千年の過去に追ふて、義姉さんは吾家に嫁した、然し春の美は外觀の裝いである麗かな義姉さんの顏には愁ひの雲の絶ねず往きつ戻りつ徘徊ふてある、それにも增した自分の情緒、過ぎにし罪と想ねは諦められる、バツトと岩に碎けて白雪の沫と消ゆる胸の亂れは、悶ねの因を遺して、未來の果まで盡きぬ妬みである、蜜を含む花の瓣は美しく咲く、咲いた花片の蜂の寄るのは餌を漁る爲めである、蜂は朗らかな野の空を睦げに躍つて蜜の花と樂しむ、そして平和なる春を送つて快よく寐むる。

いつぞやである兄は義姉さんに斯う問ふた。

「婦人の初戀は結婚前既に他の人に奪はれて居る――。」

義姉さんの胸は戰慄きと恐怖の波を打たせて髪を動かす、義姉の潔き愛は已に潰されて居つたのか――自分は閉ぢた眼を開けて室を見廻はした、森閑な夜氣を充たして永久に此の狀態を傳ねるよふである、滊車の響きは既に沈默の街を愈々點化せしめて、石像の如き義姉さんの口から微かな喇が洩れて居る、自分は再び眼を閉ぢた。

閉ぢた瞬間に再び兄の言を思い浮べた義姉さんの肉体は既に空虚と化されてある――と兄は僞んで居る。果して………

……。」

「戀に泣く男の子!!」自分は何となく冷かな笑いを催した。

……義姉さんは泣いた、自分も泣いた眼に籠る露一滴は所を隔てゝ袖を濕したのである、しかし義姉は知らねばこそ、兄の妻である

「…………。」

第三の唸きが厭した夜の幕を破つて自分の耳に劈く、總ての想像を神經から放した自分の身体は無意識の裡に義姉さんの枕邊に坐つた、取り亂した褻衣の袂から冷たい風を繰り入る、義姉さんの眼は細く開いて涙が頸を傳つて居つた。

『隆さん勘忍して下さい………。』

自分は何も答へなかつた。

『貴郎が………貴郎が學校を中途で止めに成つたも克く知つて居ります、世の………世の中に私故に………。』

切つた言語の端は胸の奥に潜んで、悶への毒を醸ます

「私の病氣は迚も癒りますまい。」

「莫迦な、那麽弱い氣を起すものぢやありません──。」

自分は義姉さんの言葉を打ち消した。

「イエ言わして下さい、私は……私は神様に誓ふて身の懺悔……懺悔します、隆さん私は良人に捨てられました、愛の無い肉体は死の五体です、ア丶苦しい、捨てられた身を隆さんに拾われて──。」

中に實の果物を送るは淫らである、赤門を出た兄は美しき果物の實の無きを憤つて姿を消した、連れは妓女であるせ云ふ事を風が便りした、しかし義姉さんは依然兄の妻である、實の無い果物でも一指染むる無き身である。

義姉さんはガバと夜着を蹴つて、細き帯の括りも解けて雪に紛ふ胸には小さき乳房が襞衣の襟から半ば露われて居る、夜着は燃ね出づる眞紅の端を覗かせて──。

悲しき美──哀れなる美──

無意識の動きを擅にしたる美ーさんは顫ふ詞に力を籠めて

「隆さん……私は、私は貴郎のお看護を心から嬉ふ思ふて居ります、貴郎が胸に滿ちる美しい望みを什麽ぞ叶ね……。」

美き人に得ならぬ香を捧げて、嫦娥の宮に詣る華の顏は神秘の境を超ねて、天國に遊ぶのである、過去の春を追想してわれの欲を滿たすは俗人の行いである。自分はこふ思ふた。

悶ね苦しみの雲が細く掩ふて義姉さんの顏は次第に朧然となる。

「ア丶──。」鋭く耳を打つ。

「義姉さんッ、緊然なさい……。」

猿臂は延びて傍らの藥瓶を握つた。

「隆さんッ……水──お水を──。」

咜昆一片の烟りと化す瞬間の慰安は、無味の水一碗が冥府の首途をなす、自分はコップを義姉さんの口に侑めた眠むるが如き顏は女神の再來である、恍惚として義姉さんは口を開けなかつた。

自分は意識の域を脱して水を含んだ、そして義姉さん口へ……刹那!?、確と握つた手は乳房に觸れた、心臓は新らしい熱き血が迸つてある。

──死の像は華の圜かに飯つた。

ア丶悲しき愛、哀れなる愛──

（完）

韓國藥界の人（上）

芦の家主人

○兒島藥學士　統監府技師大韓醫院藥局長にして韓國藥劑師會々頭たるの君は實に韓國藥界の重鎭である學術に忠にして而かも藥劑師會貳拾有餘の健兒を率ひて陣頭に立つ宜なるかな近來藥劑師の擬へるは又同君あるが故なり

●中尾藥劑正　武官派藥學者にして藥劑師會副會頭たるの君は人に接するに平民的態度を以てし言語少なくして其要を得る實に人をして思はず尊敬の意を拂はしむ君も亦兒島學士と相並んで藥界の重鎭である

●渡邊藥劑師　漢城病院藥局長の君は藥界第一流の人材である人あり君を評して不得要領の人となす然れども其不得要領の中に要領を解体止せる如くにして着々事をなす君も亦藥界の驍將である

●田中藥劑師　統監府にあつて日々の業務は本職と異なると雖も藥劑師會に忠實なる君を僊ひて他に求むべからざるの士である其の洒々落々として壯言を吐く其の働らき振りは實に正々堂々と恰かも兒島學士を參謀とすれば君は戰線の將である左右角君は藥界の勇將である

●古賀藥劑師　漢城病院にあるの君は常に沈思默考しつ丶働かざる如くにして絶へず活動しつ丶あり其學を大學に受け日々其研究に餘念なく着實にして而かも研氣あり君も亦藥界一方の旗頭である

●武川藥劑師　統監府技手として令名ある君は謹嚴卒直實に紳士の好典型である職にあつては常に技師兒島學士を助けて孜々として研究せられ家にあつては讀書に耽らる君は實に藥界の學者である、

●河又藥劑師　京城に於ける藥劑師の古參として藥局開設の率先者たるの君は又藥界の策士である其業に熱心なる今日の藥劑士中の成功者と云ふべきなりそれが爲か近頃京雀は云はく近來の君は只蓄財にのみ急にして他心なしと否々前途に或物を得んとしつ丶ある君は財を蓄へ然る後徐ろに事を遂げんとする下心にあらざるか暫らく記して今後の君が行動を見ん

雜錄

●韓國藥劑師會　二月九日京城小學校にて例會を開く來會者十三名兒島會頭の開會の辭次に當日の問題たる規則改正につき逐次討議午後四時終結をつげ次に三月例會の問題として「韓國に於ける水の衛生的試驗判決の標準」なる討論題を定めて散會す

●鷄林醫學會　漢城病院長能勢博士を會長とせる同會は今後益々發展せんとし又學術の研究にも留意して隔月一回の豫定にて雜誌を刊行する由、

●小西喜衛兵氏　大阪藥業家藥劑師の同氏は去月商務を帶び渡韓來京商用の傍觀察せられたり

●新井藥房支店　昨年京城に支店設置以來支配人藤田惣三郎氏を任て業務を擔任せしめつ丶ありしが同氏勤勉の功空しからずして本町三丁目に移轉店務を擴張し益發展の域に達しつ丶あり

●石田機械店　京仁間にて醫術機械業者として唯一の同店は如何なる難修覆物も容易に修理に應ずる爲今般精巧なる技師を招聘せられたり

定量分析問題　陳竹林

問題● 全國石の數が三万四千でヤクザ石の數が四千なり此兩者の全數を各別に乳鉢に採りて粉砕し緻密平等の質となし、後之れを元數に分割すれば各一石の學力品位欲望社會の信用の分量如何

但し答案は表示するを要す

答案

		石	ヤクザ石
學力	常識的	一、九九九	一、四九五
	專門的	〇、八九五	一、九九九
品位		一、一〇〇	〇、七九五
慾望		一〇〇、〇〇〇	一〇〇、〇〇〇
社會之信用		一、一〇〇	〇、八九五

石は博士石より按摩石に至りヤクザ石は苟しくも規定の實質検定を經たるもの以上にあるものなり

ストーブ　柳葉

ストーブと一概に云はれて終へば其れ迄だがストーブはストーブとして又樂しひものである、吾輩は白雪繽紛として降る頃に倉庫から出され定められた席に置かれて前後三ヶ月休む暇なく吾輩の體中に安價の石炭をほり込んで人間と云ふ動物が吾輩の間接の熱によつて自分等の冷へ切つた身體を温めてさも人間自身が温かくなつた如く自惚れて充分温まつた後は何等顧みる事なくしてさつさと出て行かつしやる得手勝手なものは人間である

吾輩が三ヶ月の出稼中には人間共は始終吾輩の傍に來つてくだらぬことを吐かす背の高ひ色黑の奴は朝から我れ未來の宮崎縣知事などとなんて何處をどう押したら彼樣な聲が出るのか一日中吹くはノヽとこどん迄吹ひて終ふて後胸中何等の不安なしなんて藤村流を其まゝ受賣して得々どして居る此服氣加減さ吾輩思はず笑ひかけると細そりし[illegible]奴さん[illegible]雀の口に石炭を入れて無理に固く蓋をしてすまし切つて吾輩を見て曰くストーブは便利なものだ湯も沸かされりや飯も炊かれる之れが其場限りの熱でなく長時間の温熱を保つ事が出來ると最一層便利だがな—此奴餘程贅澤な事をぬかすと思ふて居ると白衣の婦人が吾輩の傍へ來て徐ろに紅口を開いて云ひはくさ○○君つまらない事はない汚ない人を扱ふて此寒中に火にあたる暇もない程多忙しい呼々、吾輩は其れを聞いてこふ云ふてやらふとした誰れも頼んでそんな仕事をしてくれと云はない君達が慈善と云ふ事に迷はされて好んでやつて居るのでないかそんなにいやならよせばよいにと忠告してやらふとしたが懸しいかな先の奴さんが吾輩の口を閉め切つて居る爲言を發する事が出來なかつたそふこうして居る中に白衣君はでつかい尻を吾輩に向けてさつさと出て行かさつしやる後に殘つた人間は我を見て而して吾輩を見て嗚呼ストーブなるかな〳〵然し吾輩は此樣な處に永くは居たくない早く南山に爛熳たる櫻花が咲き再び古巢の倉庫に安臥されるを吾輩は待つて居るのみだ

時事評論　冷子

▲時候の變動は則ち人心の變遷を意味す夫れ山野枯凋し溪流涸るゝ秋來れば心氣消沈となり既往の事跡を顧ひ前衞の事を煩惱なす傾向を生じ物事に何となく寥々滋味を帯ぶ之に反して紅飾岸を擁し芳花紛繽の春來れば意氣軒昂となり凡ての物に活氣を帯ぶ此間の消息信に妙趣を極むるにあらずや

▲然れば物事を築立し劃策なすは秋に若くはなく之を實踐し將た貫徹に努むるは春に若くはなし

（七面へ續く）

▲此經間の眞意を咀嚼し之れを利用なすの才利わる者を識者と呼び又幸運兒と呼稱す幷は一旦立憲せし事成功せざるなきを旨ふ所以なればなり

▲今茲に彩霞山河を仰み碧水湛々の三月藥界を開拓の砭針京城藥報は韓京より發刊の旗幟を櫻雲空高く翻がへし出す思ふに之れ識者の爲せし業事に外ならず即ち予が謂ふ藤の時候の機動と人心の變遷の關係を味ひ識る人ならずんばあらず吁々壯んなる哉此擧前途多忙なる哉同紙の運命

▲殊に京城は韓八道の首府にして我國より南北滿洲扨ては北陲シベリアに到る中間に樞要の地に當る之等の地や未開にして藥業の普及邦人の手に俟つ事多し

▲是の好時機を利し京城藥報を生む將來の成功期して待つべきなり

▲處異なれば目に映ずる物事は又異なる東京模範藥局の通牒より官封廢止の興論を引起す卒ひては衞生試驗所設立の不必要を論ずるに至る實に近來の大問題の如し

▲韓國は母國と風情を異にす又藥業の狀態も大に遲れたる如き氣味なきにしもあらず此時に衞生試驗所設立の必要を論ずる者多し同一の者も其境遇によつて所論異にす

▲日本在住の藥業者は個人封緘を信憑し在韓藥業者は團體(官封の如き)封緘を奬勵す面白きものは境遇の變遷なり

商況　京城

昨年十月頃より本年二月迄の商況は實に不景氣之有樣に候不景氣と云ふよりは[illegible]休業せりと申す方適當に有之候、隨ふて藥業も一向面白き事無之唯仕入に忙しく働き居るのみに存候然し本月頃よりは追々好季節に相向ひ賣藥も隨分捌ける事と相成るべく候賣藥にて最も賣行きの好きものは梅毒藥次に胃病藥清涼藥等に有之候梅毒藥にては毒滅ドクトッ丸最も賣行よく胃病藥にては胃散胃活ピットル散の順を以て清涼劑は日韓人を通じて仁丹寶丹最も好み清心丹は大抵日人に好評を得清快丸は殆ど忘れられた感有之候藥種にては病院を得意と致し候故現時に於ては餘りに好望に無之而し之よりは當地は洋藥の雜貨と相成るべく察し候丁幾類は最も賣れ口多く候當地は酒精も安價故丁幾類及軟膏之製劑は實に有望の事と業存じ候

日韓英藥名辭典

今や日韓協約成立し彼我の交通日に月に便にして邦人の韓國に赴くもの益々愈々增加し事業に着手せり八道の山河到る處遺利多し然るに邦人の手によりて開發せられたるは僅々なるは何故ぞやこれ畢覺我國の上下眞誠に韓國其物の本體と韓民の人情風俗性質を根本的に解し得ざるの致す所にして其原因は韓語に通せざるに歸せさるべからず茲に於てか韓語研究の必要の起る所以なり

韓國は我國の好貿易市場にして殊更に我藥業とは關係深く小西行長が文祿の役に從ひ其動作の敏活なりしは夙に藥品貿易上頗る國情に通じたるを以てなりと宜なるかな我藥業は斯の如き關係を有すのみならず今後の藥品貿易は我國の掌中に收めざるべからざるを以て藥業家は須らく韓語の研究の必要を感ずる所以なり藥業家醫士奮勵それ宜く研磨せられよ依て余は先年藥學研究の爲め我國に留學せられたる韓人(同窓)の多大なる幇助を得て茲に藥業家の喝望せらるる藥名辭典を毎號掲載せんとす幸に一覽の榮を給らば何の幸か之に若かん（筑水）

日韓英藥名辭典

京城民團立漢城病院

古賀惣五郎著

日	韓	英
安知歇貌林	안티뻬드린	Antifebrine
芳香酸	아롬맷틱삔네저	Aromatic Vinegar
粗製木醋	삔네저뚜럼우드	Vinegar from Wood
海葱醋	삔네저어뿌스퀼	Vinegar of Squill
亞砒酸	아센노쓰에씨드	Arsenois acid
石炭酸	씨카볼릭에씨드	Carbolic acid

溫突放言

▲母國は第三版藥局方も實施されるになつたで前局方の品は精製しなはすか消韓へ輸出されるに異ひなからふ危險千萬だ

▲粗製藥品濫賣し其上に又候彼樣なものか舞込んだならば益々藥業家の面目を失しる

▲さそこだ盗賊の次に繩より繩の次に盗賊と云ふ工合に今から充分豫防策を講じてをかねばならぬ

▲或目的を達しるには總ての快樂を捨つべしとは或人の言なり定めてか〻人の頭腦は蝙蝠か利かぬ事でわらふ呵々

▲さて殿の職りとして聊か本紙の精神も述べ置かふ實に本紙は藥業界の木鐸を以て自任して居つて或種の新聞の如く自己の利害から割出して批評する樣な淺薄な事は仕ない不撓不屈只々斯界の發達を圖るにあるのみ乞ふ今後の本紙に之を見られよ